デボルド＝ヴァルモールにおける隣人愛

Charité fraternelle chez Desbordes-Valmore

岡　部　杏　子

はじめに

19 世紀の詩人マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールは、エレジーやロマンスに代表される悲恋の書き手として知られている。だがその一方で、当時の社会的・政治的な事柄を描いた作品については、まだ十分に知られていない。このような受容の偏重は、600 を超える詩篇のうち、政治詩が占める割合がわずが 10% に満たないことを考えると至極当然のことのように思われる[1)]。加えて、同時代の批評家や詩人からの賞賛が、恋愛や母性愛を歌った詩篇を対象としたものに集中していることもその一因として挙げられるだろう。彼女と長きに渡り家族ぐるみで交流し、最も多くの書評を残したサント＝ブーヴでさえ、デボルド＝ヴァルモールの時事的な詩篇に言及したのは彼女の死後のことである[2)]。

このように、詩人の生前にはほとんど顧みられることのなかった政治や社会情勢を扱った詩篇が本格的に研究されはじめたのは 1980 年以降のこ

1）Marc Bertrand, *Une femme à l'écoute de son temps*, Lyon, Jacques André Editeur, 2009, p. 7.

2）Sainte-Beuve, « Madame Desbordes-Valmore » dans le *Temps* du 20 avril 1869.

とである。それを牽引してきたのは、1976年に二巻から成る彼女の全詩集を編纂したマルク・ベルトランである[3)]。彼の研究成果は主に次の二点である。

第一に、デボルド＝ヴァルモールの詩篇および散文作品の一部を纏めたアンソロジーの出版が挙げられる[4)]。この著作のなかでは、彼女の政治詩が、愛、信仰、故郷、幼年時代といった主題と並んで、ある程度まとまりを持った形で紹介されている。

第二に、歴史上重要な出来事が起こった時期（1830年、リヨン暴動、1848年など）や、政治活動にも旺盛な意欲を発揮した文学者（ユゴー、ベランジェなど）との関連が見られるデボルド＝ヴァルモールの詩、書簡、一部の散文作品を項目ごとに分類した著作 *Une femme à l'écoute de son temps* の出版が挙げられる[5)]。

これら二つの著作によって、デボルド＝ヴァルモールによる政治・社会詩篇と呼ぶべきコーパスが明確化された。これを受け継いだクリスチーヌ・プランテの仕事はとりわけ重要である。とくに彼女は1830年代にリヨンで起きた絹織物職工の暴動（リヨン暴動）を扱った詩群を対象とし、デボルド＝ヴァルモールの詩法を分析している[6)]。そのなかでプランテは、デボルド＝ヴァルモールを「永遠に女性なるもの」のみを体現する詩人と見なし、彼女の詩作品「全て」を、「エクリチュール・フェミニン」というひとつの典型へと還元してしまう旧来の解釈に警鐘を鳴らしているのである。

3） *Les Œuvres poétiques de Marceline Desbordes-Valmore*, vol. II, éd. Marc Bertrand, Presses universitaires de Grenoble, 1976.（以下 éd. Bertrand と略記し、刊数および頁数を示す）

4） *Marceline Desbordes-Valmore*, Textes choisis et présentés par Marc Bertrand, HB Editions, 2001.

5） Marc Bertrand, *Une femme à l'écoute de son temps*, Lyon, Jacques André Editeur, 2009.

6） Christine Planté, «*Tout en peuple qui crie* Marceline Desbordes-Valmore et l'insurrection des canuts (1834)» in *Mélanges barbares Hommage à Pierre Michel*, Presses universitaires de Lyon, 2001, pp. 151–160.

これらの仕事を通じて、ベルトランとプランテはほぼ同様の結論に至っている。それは、デボルド＝ヴァルモールによる政治詩が、あくまでも彼女自身の経験に即した個人的なものであり、何か特定のイデオロギーに基づくものではないとするものである[7)]。確かに彼らが指摘するとおり、デボルド＝ヴァルモールは、他のロマン主義の詩人たちとは違って、ある特定の政治的立場を一貫して支持するような態度は見せていない。しかしだからといって、この詩人に特有のものと解せるような一貫性は全くないと断言するのはいささか性急すぎるのではないのだろうか。

以上に述べた近年の研究動向を鑑みると、次の課題に取り組むことが今後のデボルド＝ヴァルモール研究において必要となる。それは、デボルド＝ヴァルモールによる政治・社会的な出来事を題材にした詩篇を掘り起こし、関連する史実や伝記的事実と照らし併せながら読解し、この詩人がどのような立場から同時代の人間や社会を眺め渡しているかを把握することである。

そこで本論では、題名、大まかな執筆時期などから、主題とされている出来事が比較的同定しやすいにもかかわらず、未だに個別的な分析のなされていない二つの詩篇、すなわち 1830 年代にベルギーおよびポーランドで勃発した独立運動を扱った詩篇を取り上げる[8)]。本論の構成は以下のとおりである。まず第一章では「ベルギーの十字架の下で」を検討する。第二章では「ポーランドの婚約者」を中心とし、「老いた羊飼い」「誰が王になるか」の二篇を補足的に扱う。その結果、デボルド＝ヴァルモールの詩作品で重視されてきた「恋愛」や「母性愛」に収まらない、より広義の他者への愛、すなわち「隣人愛」こそが、彼女の政治的な態度の基本となっ

7） Marc Bertrand, *Op.cit.*, p. 134 ; Marceline Desbordes-Valmore, *L'Aurore en fuite poèmes choisis*, choix et préface par Christine Planté, Editions Points, 2010, p. 20.

8） cf. Marc Bertrand, *Op.cit.*, p. 50 ; Kajsa Andersson, «La Pologne dans la vie et l'œuvre de Marceline Desbordes-Valmore» dans *L'Images du Nord chez Stendhal et les Romantiques*, Textes réunis par Kajsa Andersson, Humanistica Oerebroensia, Artes et linguae nr 13, 2007, p. 45–71.

ていることがわかるだろう。

1.「ベルギーの十字架の下で」

1.1. ベルギー独立運動の概要

本章では、1830年に起きたベルギーの民衆蜂起を題材とした「ベルギーの十字架の下で」[9] を検討する。そのために、まずこの事件を概観しておこう。

当時ネーデルラント連合王国の統治下にあったベルギーでは、同年に起きたフランス七月革命の影響を受け、独立の気運が高まっていた。この独立運動の原因は、主に次の二点にまとめられるだろう。まず第一に、ベルギーと比較して、ネーデルラント連合王国の方が政治・経済的な面で優遇されていたという点である。そして第二に、ベルギーの大半がカトリック教徒であるのに対して、ネーデルラント連合王国はヴィレム一世によるカルヴァン主義が敷かれていたという信仰の違いが挙げられる。とりわけこの宗教上の対立は深刻であった。それは、この独立運動の発端となったブリュッセルでの暴動の際に、王のカルヴァン主義に不満を抱くカトリック教団と民衆が中心的役割を果たしていたことからも明らかである。

それでは、この暴動が起きた経緯を確認しよう。事件は、1830年8月25日の夜にブリュッセルのモネ劇場で起こった。この劇場では当時、フランス人作曲家オベールによるオペラ『ポルティチのもの言わぬ娘』が上演されていた[10]。この作品は、17世紀にスペインの圧政下にあったナポリの民衆が、ポルティチという漁村で蜂起した民衆運動を題材としたもの

9） éd. Bertrand, t. I, p. 219.

10） 1828年2月29日パリのオペラ座で初演。ベルギー独立運動の口火を切った「聖なる祖国愛」を歌ったテノール歌手はアドルフ・ヌリであった。デボルド＝ヴァルモールの複数の書簡には、ヌリのたぐいまれなる才能に対する数多くの賞賛が見られる。また『ポルティチのもの言わぬ娘』を作曲したオベールは、デボルド＝ヴァルモールの親友カロリーヌ・ブランシュと恋愛関係にあった。これらの点から、このオペラはデボルド＝ヴァルモールにとって身近な人々の手による作品であると見なすことができる。

である。このオペラの第二幕第二場で、漁師のマサニエッロとピエトロが歌う二重唱「聖なる祖国愛」に高揚した聴衆たちが、次々に劇場を出て、新聞社ナショナルや政府関連の建物を包囲した。以上がのちの大規模な独立運動へと発展していった暴動のあらましである[11)]。

この民衆蜂起に対して、ヴィレム一世は、平和的な解決策を採らず、力づくで治安を回復しようとした。その結果、同年9月23日から26日に「血の市街戦」と呼ばれる激しい制圧が行われ、多数の死傷者を出した。だが、王国軍は最終的にブリュッセルを占領することができず、同年9月26日に臨時政府が設立され、10月4日に独立が宣言された。この独立宣言は、翌1831年にロンドン会議での承認を経て、1831年2月7日に憲法制定が行われ、ベルギーは立憲君主国となったのである。

ここで付言しておきたいのは、この民衆蜂起の発端の場となったモネ劇場が、デボルド＝ヴァルモールがかつて女優として舞台に立っていた場所であるということである。彼女は1815年7月から1819年4月までこの劇場に所属し、その間に俳優である夫ヴァルモールと結婚している。そういうわけで、ヴァルモール夫妻はモネ劇場で働く友人や知人がおり、彼らとの交流は、ベルギーで独立運動が起きた際にも続いていた[12)]。こういった事実を鑑みると、デボルド＝ヴァルモールにとって、この民衆蜂起は、ひとつの政変を示す事件であるとともに、かつての友人や仲間といった身近な人々が関わる出来事でもあったと言えるのである。

1. 2.「ベルギーの十字架の下で」読解

「ベルギーの十字架の下で」には、鋭い諷刺詩で一世を風靡したオーギ

11） モネ劇場の歴史については、以下の論文に詳しい。岩本和子、「ベルギー王立モネ劇場の歴史的役割（1）：社会変革とオペラ『ポルティチのもの言わぬ娘』事件まで」、『近代』、神戸大学、2004年5月、第93号、31–58頁。とりわけ『ポルティチのもの言わぬ娘』とベルギー独立革命との関わりについては、41–55頁を参照。

12） Marceline Desbordes-Valmore, *Lettres inédites, 1812–1857*, recueillies et annotées par son fils Hyppolyte Valmore, préf. de Boyer d'Agen, Notes d'Arthur Pougin, Louis-Michaud, 1912, p. 46.

ュスト・バルビエの「誘惑」[13] からの四行がエピグラフに引かれている。これは、「ベルギーの十字架の下で」においても同様に、「現世の様々な問題の種」が扱われていることを予告する働きを担っていると考えられる。その内容は、この詩篇の題名で用いられている「十字架」という語が示唆するとおり、決して明るいものではない。デボルド＝ヴァルモールは、独立運動による民衆の勝利や自由の獲得といった華々しい側面ではなく、そのために払った犠牲というネガティヴな側面に焦点をあてているのである。これらの点を踏まえた上で、本節では、誰が、どのように、何について語っているかという点を確認しながら、この詩篇を読解してゆきたい。

神聖なる軍隊に属する二人のさまよえる子どもは
夜になると、聖なる丘を忘れて、
翼をさまよわせながら時代の谷間で
現世の様々な問題の種を静かに蒔いている！（オーギュスト・バルビエ）

生温い花々の香りを嗅ぎに墓からやってくる
すばしっこい鳥の階調豊かな声も、
おまえの兄弟である子どもの涙混じりの祈りも、
きしむこだまの中で、若者よ！おまえを墓へと押し込め、
おまえの人生で出来たたいまつを倒した
冷酷な暴君の忌まわしいファンファーレも、
おまえたちの！王による動乱で血にまみれた花々である
その頭を刈り取る宮廷の砲弾も、
もはやおまえの早すぎる眠りを目覚めさせはしないだろう！

13） Auguste Barbier, «La Tentation» dans *Iambes*, Urbain Canel et Ad. Goyot, 1832, p, 12.

だがやつらの偽証する大砲の雷のような大声が
跳ね上がる度に罵詈雑言を布告し調印する。
そしておまえの震える星に捧げた私の女の嘆きが
血まみれの平然とした嵐のなかに落ちてゆく。
そして涸れ果てた祈りのなかのこの愛の声、
打ちひしがれた母のこのすすり泣きが
おのれの若いユリを探しながら死者たちの平野で
長い叫び声を上げた。「大地よ、私の息子を返してくれ！」

誰もおまえを目覚めさせないだろう。おまえの寝床は深いのだから。
ああ！あまりに多くのイトスギの上に自由は基づいている！
ああ！神よ！あまりに多くの血が高潔な鉄を浸している！
おまえたちの消え果てた夢の中で、眠れ、気高き犠牲者たちよ。
私たちは奴隷状態でよいのです、でもやつらには罪を！
最も信心深い王は地獄の存在など信じていないのです！[14)]

1. 2. 1. 母のディスクール

この詩篇で、デボルド＝ヴァルモールは、息子を亡くした母親の嘆きを通じて暴動の犠牲者を悼み、残された者の悲しみを描いている。以下、一連ずつその内容を確認してゆこう。

第一連目では、ひとりの「若者」の死が深い眠りになぞらえられながら語られている。彼を死に至らしめたのは、「冷酷な暴君」「王による動乱」「宮廷の砲弾」という語で示されているとおり、王国軍側の人間である。

第二連目では、この「若者」に対する呼びかけの主が彼の「母親」であることが明かされている。デボルド＝ヴァルモールは、最終行の「大地よ、私の息子を返してくれ！」という叫びに至るまでに、「私の女の嘆き」「こ

14） éd. Bertrand, t. I, p. 219.

の愛の声」「引き裂かれた母のこの嘆き」と詩句を重ねてゆき、死者と生者が息子と母親という関係であることをゆっくりと明かしてゆくのである。

以上の点から、デボルド＝ヴァルモールが第一連目、第二連目のなかで描いているのは、死んだ息子への母親の呼びかけ、すなわち、残された女の嘆きであると言える。それはサント＝ブーヴが言うところの「悲しみの聖母」[15] の姿そのものであり、彼女の詩の特徴として繰り返し指摘されてきた「女性性」や「母性」とまさしく合致するものなのである[16]。

しかし、第三連目で、母親が呼びかける相手が、死んだ息子から、「犠牲者たち」と「神」という異なる二つの対象に変化している点を考慮すると、この詩篇の主題を母性愛のみに還元することは困難になるだろう。というのも、この変化は、詩の主体である母親が、「親子」という関係から、「遺族と犠牲者」ないし「人間と神」というより広い立場で語っていることを示しているからである。

では、デボルド＝ヴァルモールは、「犠牲者たち」と「神」に何を語っているのだろうか。まず、前者に対する呼びかけを検討してみよう。「おまえたちの消え果てた夢のなかで、眠れ、気高き犠牲者たちよ」という詩句では、「眠れ〜よ」という典型的な子守唄の言い回しが用いられている。つまり、この母親は、自分の息子に呼びかけるように、独立運動の「犠牲者たち」全ての母親として彼らに呼びかけていることがわかるのである。

次に神に対する母親の呼びかけを確認しよう。まず、「ああ！あまりに多くのイトスギの上に自由は基づいている！／ああ！神よ！あまりに多くの血が高潔な鉄を浸している！」という二つの感嘆文を見てみよう。墓に植えられる木として知られる「イトスギ」と「血」は、ともに犠牲者の提喩である。これらに、«trop de» という量の過剰を示す語が付されることで、死者の多さが表現されている。ここでわれわれが注目したいのは「イ

15） Sainte-Beuve, *Portraits contemporains*, Calmann Lévy, 1878, p. 151.
16） cf. Aimée Boutin, *Maternel Echoes, The Poetry of Marceline Desbordes-Valmore and Alphonse de Lamartine*, Newark, University of Delaware Press, 2001, pp. 173–180.

トスギに基づく自由」という表現である。イエスの磔刑に使用されたと伝えられるこの木と「自由」という語が共に用いられることによって、「気高き犠牲者たち」の死にはイエスの犠牲という宗教的な意味が付与されている。したがって、デボルド＝ヴァルモールは、独立運動の犠牲者たちを「殉教者」として描き、彼らの死を神聖なものとして悼んでいると解釈できるのである。

1. 2. 2. 為政者への批判

では、デボルド＝ヴァルモールは、単に死者を嘆き悼むだけなのだろうか。そうではないことは、神に対する呼びかけの続きから読み取れる。デボルド＝ヴァルモールは、第三連目の最後の二行で、彼らを弾圧した国王側に対する非難を表明している。本節では、その内容を示し、第一章のまとめとしよう。

第一連目で息子を殺した「冷酷な暴君」«despote glacé» は、最後の行で「最も信心深い王」«Le roi le plus dévot» と形容され、新たに宗教的な性質が付け加えられている。「最も信心深い王は地獄の存在など信じていないのです！ 」という詩句は、ネーデルランド王ヴィレム 1 世が激しい民衆弾圧によって多くの人々を死に至らしめたことを神に訴えるものである。その根底にあるのは、カルヴァン主義が説く「予定説」に対する批判である。「予定説」とは、現世でどのような行いをしようとも、天国にゆくか、地獄にゆくかは予め神によって定められているとする考えである。よって、デボルド＝ヴァルモールは、「地獄を信じていない」という表現によって、カトリック教徒にとって、殺人が地獄落ちの罪であるのとは違い、カルヴァン主義者であるヴィレム一世にとっては宗教上の罪には値しないことを暴いているのである。

このような教義の違いを考慮すると、「私たちは隷属のままに！／彼らには罪を！」という最後から二番目の詩句における対立関係が、単に「民衆と王」や「被支配者と支配者」といった社会的な身分に回収されるもの

ではないことがわかるだろう。ここで重要なのは、デボルド＝ヴァルモールが、「私たち」という一人称複数形を用いている点である。なぜなら、この人称代名詞の使用からは、彼女がカトリックという同じ信仰を持つ者として、犠牲者やその遺族と同じ立場に自身を位置づけていることが読み取れるからである。

以上の読解で明らかになった点を纏めよう。デボルド＝ヴァルモールは、この詩篇において、まず息子を亡くした母親として、次いで犠牲者全ての母親として彼らに哀悼の意を捧げている。このように、子どもを亡くした母親の悲しみが中心に描かれていることから、この詩篇の主題は、民衆蜂起という悲劇に見舞われた「女の嘆き」であり、詩人がこの民衆蜂起をどのように捉えているかを示す指標は見られないように思われる。しかし、犠牲者たちの死をイエスの犠牲に比するものとする描写や、王の信心深さに基づいて行われた弾圧という表現の意味を検討することによって、デボルド＝ヴァルモールが、この独立運動の宗教的な側面を重視し、犠牲者への哀悼を宗教的同胞という立場から捧げていることがわかるのである。

2. デボルド＝ヴァルモールとポーランド独立運動

本章では、1830 年にポーランドで起きた民衆蜂起に想を得た詩篇「ポーランドの婚約者」を検討する。この民衆蜂起の原因は、同年に起きたフランス七月革命およびベルギー革命を鎮圧する目的で、帝政ロシアがポーランド軍派遣を決定したことへの反発である。ロシア皇帝ニコライ一世は、民衆を激しく弾圧し、その結果、多くのポーランド人が祖国を追われることとなった。

当時、デボルド＝ヴァルモールが滞在していたリヨンでは、ポーランドからの亡命者を救済するための様々な措置が取られていた。 デボルド＝ヴァルモールは、こういった慈善事業に積極的に参与している。彼女は、1831 年 1 月 31 日に、リヨンの雑誌 *Le Précurseur* がポーランドの民衆蜂

起を支援する声明を発表した際に、経済的に苦しい身でありながら、僅かな額を寄付している[17]。その際に、詩人は「人類愛によってあなたたちが行おうとすること全てに幸あれ。来たる自由こそ称えられてあれ」と書き添え、ポーランドの民衆の幸福を祈っているのである[18]。続いて同年6月に、ポーランドからの難民の生活を扶助する目的で創設された寄付団体、いわゆる「バザール・ポロネ」と呼ばれるマーケットが設置された際には、「涙の書への返礼（バザール・ポロネに）」[19] と題した8行詩を添えて1830年版『詩集』を寄贈している。この詩には、『詩集』の販売促進を祈念する詩人の意図が率直な言葉で記されている。とりわけ、「私だって鎖を断ち切りたいのです／ですが私は貧しい身です。おお裕福な方！私を買ってください」[20] という詩句からは、ポーランドの民衆同様に貧困に喘ぐ身でありながら、彼らの隷属状態を改善したいという詩人の真摯な願いが読み取れるのである。

本節で扱う「ポーランドの婚約者」もまた、同様の動機に基づいて書かれた詩篇である。そのことは、この詩篇が初めて掲載された雑誌 *Mémorial de la Scarpe* の主幹に宛てられた書簡からも明らかである。デボルド＝ヴァルモールはこの書簡のなかで、ポーランドの独立を「重要な政治問題」と明言し、極めて時事的なこの詩篇が1831年、つまり当該の民衆蜂起のさなかに掲載を許可されたことへの感謝の念を示しているのである[21]。

ここまでで示したように、デボルド＝ヴァルモールは、ポーランドの民衆蜂起によって生じた弱き者、貧しき者に対して積極的に救いの手を差し伸べている。この点を踏まえた上で、以下に当該の詩篇を引用し、その内容を検討してゆきたい。

17） Francis Ambrière, *Op.cit.*, p. 390 ; Marc Bertrand, *Op.cit.*, p. 57.
18） Francis Ambrière, *Ibid.*
19） éd. Bertrand, t. II, p. 450.
20） *Ibid.*
21） éd, Bertrand, t. I, p. 366.

2.1.「ポーランドの婚約者」読解

そして彼女たちの全ての善行は記憶をはぎ取りながら、
おのれの栄光による許しを神に乞い願いにゆく[22]。
デルフィーヌ・ゲイ（ド・ジラルダン）

「開けてください！」―誰が戸をたたくのだろう
たいていは人が眠っている時間に。
生きて帰ってきて
泣いている負傷者だろうか。
―「開けてください！お願いです。
遠くの小さな私の集落から
祖国に運んできたのです。
私の最も美しい持ち物を。

悔いることなく飛んできた
見張り番の天使たちの
白い翼があなた方の死者たちを
包んでいるのを 私は見たのです！
見てください！彼らの棺は
いかなる布にも包まれていません。
哀れみを。あなたのヴェールを投げなさい！
彼らには経帷子がないのです！」

22） Madame Emile de Girardin（Delphine Gay）, «Le Dévouement des médecins français et des sœurs de Ste Camille dans la peste de Barcelonne» dans *Poésies complètes*, Librairie nouvelle, 1856, p. 69.

そして天使の額をした女は
涙の浮かんでいない悲しげな瞳で、
苦しみに挑み、
全てが変わった大地から
与える神の名のもとに、
忌まわしい祭壇の上に
死にゆく兄弟たちへの
慎ましい施しを運んできたのです！

「私は約束する… 約束しました
あなた方の神を護る者と。
だが婚姻は延期されました。
私たちは天で再会するでしょう！
私を結ぶこの指輪が
私の心を引いてゆくでしょう。
これは私の人生の財産です！…
それがあなた方に幸福をもたらしてくれますように」

すると、別の世界からやってきた
鳩が、愛の秘密のようなものを
一つの墓の上に投げるかのように、
自分の試練に忠実に、
血に染まった軍旗の上に
若くして婚約者を亡くした処女は
震える指輪を置きました。

道にいる負傷者たちに
心が種蒔いたこれらの財産を

神は目にし、そして愛しています。
神はそれらを手の中で味わっています。
そして武装した老司祭たちは
金の指輪に口づけし、
それを涙で飾りました。
王たちよ、この宝を畏れなさい！[23)]

この詩篇に描かれているのは、「若くして婚約者を亡くした女」が祖国に舞い戻り、同胞を救うために自分の婚約指輪を寄付するという慈愛に満ちた振る舞いである。ここで留意しなければならないのは、デボルド＝ヴァルモールのみが婚約指輪の寄付というモチーフを用いているわけではないという点である。というのも、これと同様のモチーフが、十一月蜂起を元にしたカジミール・ドラヴィーヌによる「1831 年のヴァルソルヴィエンヌ」の一節にも見られるからである[24)]。ドラヴィーニュは、ワルシャワ郊外のプラガで起きた暴動の描写ののちに、婚姻指輪の寄付を「ポーランドと自由を永遠に結びつけるもの」として描いている[25)]。したがって、ドラヴィーニュもデボルド＝ヴァルモールも、このモチーフを民衆蜂起による犠牲を穴埋めするものとしている点は共通している。だが、両者には違いもある。それは、ドラヴィーニュが、指輪の寄付を夫とともに闘う多

23） éd. Bertrand, t. I, pp. 239–240.
24） Casimir Delavigne, «La Varsorvienne» dans *Messéniennes : Chants populaires et poésies diverses*, Charpentier, 1852, pp. 140–143. 「婚約指輪」がモチーフとされているのは、以下の連である（下線による強調は引用者）。
«Allons, guerriers, un généreux effort!
Nous les vaincrons ; nos femmes les défient.
O mon pays, montre au géant du nord
<u>Le saint anneau</u> qu'elles te sacrifient.
Que par notre victoire il soit ensanglanté ;
Marche, et fais triompher au milieu des batailles
<u>L'anneau des fiançailles</u>,
Qui t'unit pour toujours avec la liberté.»
25） *Ibid*.

くの妻たちの行為として描いているのに対し、デボルド＝ヴァルモールは、それを婚約者を亡くしたひとりの女による行為としている点である。したがって、仮にデボルド＝ヴァルモールが、「ラ・ヴァルソルヴィエンヌ」から着想を得ているとすれば、寄付をするのが独り身の女であるという点に、彼女の独自性があると言えるだろう。そこで施しの品である「指輪」と、施しの主体である「女」の二点に焦点をあてて、この詩篇を読解してゆきたい。

2.1.1. 指輪と女

まず、この詩篇に描かれている「指輪」がどのようなものなのかを確認しよう。この指輪は、第一連では単に女の「最も美しい持ち物」と形容されるに留まっている。そのため、デボルド＝ヴァルモールは、美的な面のみを重視して、指輪を祖国への捧げものとして選んでいるようにも思われる。だが、第三連目で「慎ましい施し」と呼ばれた指輪は、第四連目で、この女の婚約指輪であることが明らかにされる。重要なのは、「婚姻は延期されました」という詩句や「若くして夫を亡くした乙女」というように、施す者が未来の夫を失い、あまり幸福とは言えない状況に置かれていることが示唆されている点である。なおかつ同じ第四連目で、この指輪が「自分の生の財産」と呼ばれていることからは、この女が他に財産を持たない貧しい身であることも推察される。このように、祖国への寄付として、単なる装飾品のひとつではなく、唯一のものである婚約指輪が選択されていることは、自分以上に苦しい立場に置かれている他者を思いやるという貧者の徳を意味していると言えるだろう。

次に、それを祖国に捧げる女がどのような人物として描かれているか見てゆこう。第二連目で示されているとおり、この女が施しをする動機となったのは、経帷子すら与えられていない死者への憐憫である。特筆すべきなのは、この女が、生きている同胞たちに対しても「ヴェールを投げよ」と命じ、自分と同様の行為、つまり死者への寄付を促している点である。

この描写からは、女が民衆を率いる女神のように、生きている同胞に呼びかけ、扇動する能動的主体として描かれていることがわかるだろう。そのことは、最終行で用いられている命令法による詩句からも読み取れる。そこでは、ひとりの女による寄付が、彼女よりも高い地位にある為政者たちを畏怖させる力をもつことが示されているのである。

以上、二つの点に注目してこの詩篇を読解するとわかるのは次のことである。デボルド＝ヴァルモールは、ひとりの寡婦による同胞への施しを、単なる金銭的な援助としてではなく神や司祭の加護を受けた善行として描いている。その施しは、死者や負傷者たちといった弱き者の救済のみならず、生者に友愛の意識を導入し、為政者たちを批判するという役割を担っているのである。

2.1.2. 王たちとは誰か

次に、最終行で描かれている「王たち」という複数形の使用について考えてみたい。前章で扱った「ベルギーの十字架の下で」と同様に、デボルド＝ヴァルモールは、最終行で「王」に対する批判によってこの詩篇を締めくくっている。この「王たち」が具体的に誰を指すのか、またなぜ複数形で示されているのかをこの詩篇のみで同定することは困難である。だが、この詩篇と同様に雑誌 *Mémorial de la Scarpe* に掲載され、詩集『涙』のなかでこの詩篇の次に排列されている詩篇「老いた羊飼い」に関するフランシス・アンブリエールの解釈を援用すると、「王たち」という複数形の使用に、より妥当な見解を与えられると思われる。アンブリエールによる解釈とは、「老いた羊飼い」のルフランである「私たちの善良な王は彼らを見捨てたのだ」という詩句に、十一月暴動への介入を拒んだルイ＝フィリップに対する批判が込められているとするものである[26]。そこで、この解釈をより深く理解するために、「老いた羊飼い」の基本的な枠組みが

26） Francis Ambrière, *Op.cit.*, p. 395.

提示されている第一連目を確認しよう。この詩篇は、「私」と名乗る人物が、喜び踊る自分の子どもたちに「ある悲しい知らせを運んできた」と報告するという形式を採っている。その知らせは「おまえたち［＝子どもたち］の兄弟があそこで死んだのだ」、「彼らはキリスト教徒であり不幸な者なのだ」という詩句から読み取れるように、宗教的同胞の死である。「私」は、この同胞たちの死を嘆き悼みながら、彼らを救おうとしなかった自分の国の為政者を「私たちの善良な王は彼らを見捨てるのだ！」というルフランで繰り返し批判しているのである。この内容と執筆時期から、アンブリエールは、このルフランに描かれている「私たちの善良な王」がルイ＝フィリップを、「見捨てられた彼ら」がポーランドの民衆を示唆するものであると解釈しているのである。このように、ほぼ同時期に書かれたとされる「老いた羊飼い」に「私たちの王」という語でルイ＝フィリップへの批判が展開されていることを勘案すると、「ポーランドの婚約者」における「王たち」という言葉にも、このフランスの為政者が含意されている可能性は十分にあるだろう。そこには、宗教的同胞であるポーランドの民衆たちを救済しない「王たち」全てに対する批判が込められていると考えられるのである[27)]。

またこの解釈を補完するものとして「誰が王となるか」という詩篇も挙げられる。というのも、デボルド＝ヴァルモールは、六連から成るこの詩篇の第二連目でフランス、第三連目でアイルランド、第四連目でポーラン

27）この解釈を補強するものとして挙げられるのが「老いた羊飼い」のエピグラフとして付されている「ヨハネによる福音書」の「イエスは良い羊飼い」からの次の文章である。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」。この聖書の言葉を踏まえて当該の詩篇を解釈すると、人々の導き手を意味する「良い羊飼い」は為政者の、囲いは国家のアナロジーであると見ることができる。つまり、ここで示されているのは、良い為政者は、自分の囲いに入っていない羊、すなわち他国のカトリック教徒も導くべきであり、最終的には「一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」という文に示されるように、全ての宗教的同胞を導くことを務めとすべきであるという考えである。このような言葉をエピグラフに引くことによって、デボルド＝ヴァルモールは、宗教的同胞を見捨てる王の悪事を対比的に提示するとともに、共通の信仰に基づく愛と連帯の重要性を説いているのである。

ドというように、ひとつの詩篇のなかで、カトリックという共通の信仰を持つ国々を取り上げ、それぞれの国が危機的状態に置かれていることを示しているからである。その一例として、ここではポーランドが描かれている第四連目を見てみよう。

そしておまえよ、愛されている亡霊よ！彷徨える崇高な亡霊よ、
血まみれになって逃げ、おまえの武器で殺された
おまえはおのれの死者たちと亡骸を殺されるがままにした
ポーランドよ！おまえの亡命にキリストは宇宙を開いた。
　おまえの深い貧困は
　この世を泣かせた
赦してくれ、おおキリストの息子よ、キリストの定めの中で照らしてくれ！
いつかみなが自由になり、神だけが王になるだろう！[28)]

　このように、デボルド＝ヴァルモールは、ポーランドを「亡霊」と形容し、多くの死者と貧困にあえぐ人々の苦しみを「キリストの息子」に訴えている。これと同様に、フランスとアイルランドが描かれている第二連、第三連においても「飢え」や「貧困」に苦しむ民衆の救済が神への訴えとされている。 これら三つの国々の民衆が、一様に「キリストの民衆たち」、「キリストの兵士たち」と呼ばれている点や、第二連目の「神が世界を作り、キリストが福音を作った／それは天と人類の憲章だ」という詩句は、デボルド＝ヴァルモールが、共通の信仰を持つ三つの国々の人々をひとつのまとまりとして認識している証左であろう。

　それでは、「誰が王となるか」という題名によって示唆されているこの宗教的同胞を取りまとめるに相応しい王とはいったい誰なのだろうか。そ

28）　éd. Bertrand, t. II, p. 641.

の答えは、各連の最終行に置かれ、この詩篇のリフレインを形成している「いつかみなが自由になり、神のみが王となるだろう！」という詩句で明示されているとおり「神」である[29]。この詩句の繰り返しからは、デボルド＝ヴァルモールが、カトリックを基盤とした国家の樹立と敬虔な信徒である為政者の到来を強く希求していることが読み取れるのである。

もちろん、「神のみが王となるだろう」という表現は、最後の審判の時、すなわち、「怒りの日（ディエス・イラエ）」を連想させるものでもある。それは、この詩篇の第一連に、まず「 懲らしめの鞭で武装したキリスト」が登場することからも推察される[30]。このキリストは、「正義の名のもとに」、「冠をした売り子たちを追い払い」「首を絞められた生け贄の金の雄牛を引き裂きながら、／己の怒りを平伏す民衆たちに吹き込んだ」というように、不義に対する裁き手として描かれている。ここで我々が注目したいのは、この詩篇で用いられている「鞭」や「売り子たちを追い払い」という語が、「ヨハネによる福音書 」2：15 において神殿にはびこる両替人たちを追い出すという怒れるイエスを喚起させるという点である[31]。このイエスの怒りは、神殿を金儲けの場としている人々の堕落に向けられた義にかなったものである。この怒りの意味を踏まえると、「誰が王になるか」という詩篇において展開されるフランス、ポーランド、アイルランドの民衆の困窮は、金銭の授受に比する瀆聖を行う者の存在を暗示するとともに、来るべきメシアの再臨に先立つ苦しみを表現するものであると解することができるだろう。

29） この詩句は «La Vallée de la Scarpe» の最終行でも用いられている。cf. éd. Bertrand, t. I, p. 168.
30） éd. Bertrand, t. II, p. 641.
31）『新約聖書　新共同訳』、日本聖書協会、1987 年、p. 166.

おわりに

以上、第一章ではベルギー、第二章ではポーランドにおいて1830年代に起こった民衆蜂起を扱った詩篇を読解した。これらを通じて明らかになった点を以下にまとめよう。

まず、彼女にとって、1830年に近隣諸国で立て続けに起きた民衆蜂起は、カトリックの信仰に基づく社会共同体の実現に向けた運動であった。この時期のデボルド＝ヴァルモールは、宗教的同胞の苦しみ、とりわけ犠牲者の死に対して強い反応を示しているのである。次に、本論で扱った詩篇における不敬虔な王への批判から読み取れるのは、カトリックの信仰に基づく統治こそが彼女の理想とする政治体制であるということだ。

以上のことから次のことが結論として導き出せるだろう。デボルド＝ヴァルモールが関心を寄せる時事的な問題は、彼女の宗教的・倫理的使命感を呼び起こすものであった。その根底にあるのは、カトリックという共通の信仰を持つ同胞たちへの愛、つまり隣人愛である。したがって、デボルド＝ヴァルモールの政治詩の基調をなすのは、弱き者、貧しき者となった宗教的同胞への愛なのである。